

世界の

半分は、

夜だ。

世界の半分は、夜だ。

だから僕は君が待つ夜へと歩を進める。

ツキのことを思う。ツキの肉を思う。黄色いツキの腹。冷たくて、厚くて、湿った肉。それはとてもジューシー、だから、僕はかぶりつきたくなる。ツキはそれをとてもいやがる。だって、それって、いたい、もの。だから僕はツキを食べることが出来ない。でも、それでいいのかもしれない。食べ尽くした後の、白い骨と赤い肉が混じったツキを見るのは少し心が痛むだろうから。

ところで、犬が吠える。

僕はその時、震えている。隙間風がびゅうびゅうと吹いていたから。吠えていた。わんわん。なっている。その犬に、名前はまだない。かつてはあったのかもしれないが、ない。僕がまだつけてないから。だから、僕が呼ぶ名前はない。だから、なんて呼んで欲しい？と、僕は聞く。わん、と犬は言う。

そして名前は、わん、になる。いい名前だ。わん。そう思う。何度でも呼びたくなる。わん、わん、わん。

わんはおばあちゃんの家に行った。おばあちゃんが生まれて育って死んだ家。おばあちゃんは死んだけど家はまだ生き残っていて、でもやはり死にかけている。ある床板は腐り、ある土壁は崩れ、ある天井には穴が開き、ある障子には茶色い何かが染みている。もう誰も住んでいないはずだ、と聞いた。もう電気もガスも止めている。母親がそう言った。僕は母親の依頼で来ていた。確認と整理、そして移住の下見だ。もう誰もいないはずだからさ、ちょっと頼まれてよ。そう言われたはずだ。

でも、違った。犬がいた。わんだ。

わんがいた。

白い犬。白いけど薄汚れていて、黄色い犬。吠える犬。家の中は真昼間にも関わらずうすぼんやりとした暗闇に覆われていて、その犬はそのうす闇から浮かび上がってくるようにして僕の前に現れた。腐りかけた床板を爪が弾く音が聞こえた。かちっかちっ、と爪が鳴って、吠えた。力ない声だった。悲しい声とか絶望した声、というものではない。ただ、力がなかった。

「なあ」と、僕は言った。

「お前、なんで、いるんだ？」

犬は力なく、また、吠えてから、その場にうずくまった。そして、それから動かなくなった。

僕はそしてツキのことを思う。ツキの肉。肌。あぶらあげみたいに柔らかい。あぶらあげはおいしい。僕はそれを知っている。甘辛く煮ても、かりかりに炙ってもおいしい。でも、ツキはそれを知らない。そう言っていた。

「あたし、あぶらあげって食べたことない」

本当か？

僕は驚く。おいしいのに。ツキの肌みたいにやさしくて柔らかいのに。

だから、僕は、ツキにあぶらあげを食べて欲しい、と思う。いいあぶらあげがある。おばあちゃんの家の前を通るおとうふ屋さんが売っているあぶらあげだ。わんも好きだから、僕は時折買って与える。わんはむしゃむしゃと欠片を撒き散らしながら食べる。それを眺めながら、こいつは

もしかしてきつねなのだろうか、と僕は笑う。ぷーぷー、とおとうふ屋さんは笛を吹く。そのうち、わんはその笛の音に反応を示すようになる。わんわんと力なく騒ぎ立て、落ち着きなく歩き回るようになる。だから、僕はそれを買って与える。夕方だ。おとうふ屋さんはいつも夕方、日が沈む前を通る。赤い日。柿の羊羹みたいに、赤い日。

ところで日が沈むその瞬間は、昼と夜を分かち、その瞬間なのだろうか。

それはだいたい、線の形をして訪れる。僕はあぶらあげを購入しながらそう思う。百三十円だから、二十円のおつりを受け取りながら、眺めている。地の果てから這い上がったみたいな赤い光がそびえ建つマンションの隙間から見える。それはマンションの壁面を赤く染める。マンションの壁面は歪な四角形が三つ連なったような形をしている。一つ向こうにある道路から、自動車が走る音が聞こえた。エンジンの音だ。不機嫌そうな音。ツキが鳴らす喉みみたいな音。

ツキはよく、喉を鳴らした。ぐるるる、と鳴った。ご飯を食べるとき、家に帰ってお茶を飲んだとき、眠るとき、一緒にお風呂に入ったとき、色んなところでよく、鳴らした。犬みたいだな、と僕は言って、別に不機嫌なわけじゃないんだよ、とツキが言った。あるときは布団の上で裸になりながら、鳴らした。僕はそのとき、ツキの腹のしわを懸命に舐めていた。

「別に、鳴らしているわけじゃないんだよ」

「鳴ってるだけなんだよ」

「自動的に鳴っちゃうんだ」

ツキの腹のしわは、汗ばんでいたせいとか塩辛く、あと微かに甘い。僕はそれをツキに伝える。なんでおなかがあまいのよ、とツキは笑うが、甘いものだから仕方がない。飴玉のように、とまではいかない。グミキャンディーのように、とまではいかない。よく煮たあぶらあげのように、でもない。素敵な女の子の髪の毛の毛のにおいのように、でもない。でも、甘い。それは喩えるなら、僕を形作る繊維、そういうものがあるとして、そのひとつひとつ、奥底に沈んでいくよう、だ。

そうだろ？とわんに聞く。

わん、と応える。

知らないくせに、と僕は思う。お前は僕のことを何も知らない。僕だってお前のことを何も知らない。そのことが一瞬、奇妙なことであるように思えたが、よく考える間もなく、当たり前のことであると気づいた。そもそも僕はツキのことだって、よく知らない。僕はそう思わなかったけど、ツキがそう言ったのだから、恐らくそうなのだろう。

僕は知らない。知らないくせに、ツキのことを考える。昼と夜を分かち、その瞬間について考える。その線は、今、ちょうど僕の頭の上にある。その線は僕の両手の方向に伸びて、地の果てに落ちている。夜の始まりは地の果てからやってきて、僕を覆おうとしている。ツキみたいだ。そう思う。すっかり覆いつくしてしまおうとしている。夜が覆いつくすみたいにして、ツキは僕を覆いつくしてしまおうとしている。

僕は歩いている。横にわんがいる。じっとしてろ、と僕は言うけど、わんは聞かない。小さい足を細かく動かしながら、ついて来る。道路を走る自動車が僕らを照らす。照らして、通り過ぎる。その音が大きくなって、小さくなって、また大きくなる。

ツキに会うのは、まだ先だ。

僕はまだツキに会っていない。それでも、僕とツキの思い出は染み広がってゆく。
増え続けてゆく。

過去と未来はまぜこぜになって、僕の内側で渦を巻いている。

本当だ。僕は本当のことを言う。なぜならそれは、大事なことではないからだ。僕は大事ではないことを言う。大事ではないことだけを、言う。なぜならそれは、大事なことではないからだ。僕は大抵の大事なことが、嫌いだ。

そういえば君は、ツキは、玄米茶が好きだ。だから僕も、たくさん飲む。急須にのこる、ふやけた茶葉を見るのも好きだし、舌の上に茶渋がこびりつくのを感じるのが好きだ。そう言うと、ツキは笑う。そんなの、どのお茶でもおなじでしょ。ガラス戸から吹き込んでくる隙間風みたいな笑いだ。が、そうだ。ツキが言うとおりの。でも僕は玄米茶が好きだ。ほうじ茶でも緑茶でもなく、玄米茶が好きだ。だから、たくさん飲む。そして、おしっこに行きたくなる。自分の膀胱が膨らみきっているのを感じ、理解する。また、ツキが笑っている。飲みすぎだよ、なんどいけば気がすむの。何度だって、と僕は答える。そうだ。僕は何度だってトイレに行く。放尿する。玄米茶が好きだからだ。ツキの部屋のトイレは、白い。きれいだ、と思う。吐き出してしまうくらいきれいだ。僕が住むところのトイレとは大違いだ。ツキの部屋の白いプラスチックの便座は、冷たくない。温かい。それは僕の尻の肉と同じくらい温かいので、僕は自分は座っていないのだと思ってしまう。うっかりだ。僕は何度だってうっかり、そう思ってしまう。僕が何かを感じるのは、おもに、違うものに対してだからだ。だから、自分の尻の肉と同じくらい温かい便座を、自分の尻のように感じてしまう。

僕はだから、ツキのことを感じる事が、出来る。僕に触れる、ツキの肉を感じる事が出来る。おいしそうなツキの肉。柔らかく湿って、厚い肉。ジューシーな肉、を。ツキは僕とは違う。ぜんぜん違う。穴が開いているし、膨らんでいる。落としてしまった思い出のように煌めく両の目玉は落としてしまった思い出のようにじっと僕を見つめる。いやらしい裂け目みたいな唇はいやらしい裂け目みたいに広がりながら、でも、何も告げない。

「どう、したんだよ？」

何も告げない。その代わりに、舐める。僕の頬はざらりとしたツキの舌で濡れる。じきに唾液が乾いてその匂いが右の鼻腔に触れる。

僕は、そのにおいを何度も思い出す。何度でも思い出す事が出来る。それは例えば、君に向かう、今、この時にも。黄色くも白い、薄汚い犬と歩いているこの時にも。

わん。

違う、お前じゃない。

僕の頭上には、黄色い円が浮いている。いつの間にか、昼と夜を分かち、その瞬間は空の端に移動した。浮いているのは、君と同じ名前の星だ。星の輪郭は、深く青い空の中に、くっきりとした円を描いている。あまりにはっきりしているのだから、それは、穴が開いているのだと錯覚する。冷たい空気が頬を削る。でも、黄色い円と僕の頭の上に黄色い、光の線がある。帯状の光が差す。だから、大丈夫だ。

「ねえ」

「ねえ、なんでそんな顔してるの？」

僕は廃屋に迷い込んだ小汚い犬のような顔でもしていただけるか。

「ねえ、なんでそこにいるの？」

やめろ。僕に「なんで」なんて言うのはやめろ。僕はわんとは違う。犬とは違う。君とも違う。僕は、あぶらあげが好きだ。おばあちゃんの家の前を通る豆腐屋さんのあぶらあげがいい。君の肌によくにている。僕は君の肌が好きだ。特に、お腹の肌がいとおいしい。湿っている。

「やめて」

「そんなことを言うの、やめて」

なぜだ？僕は、そんなこと、が、言いたい。発語したい。伝えたい。君に、知って欲しい。

だから、こうして、高らかに、力なく、吠える。

吠えたその声が、君のまっ白い部屋に似つかわしくはないな、と僕は思う。でも、吠えて、君はいやな顔をする。ごめん、て思う。けど、吠える。発語する。伝える。君に。

かじる。

かぶりつく。

君の体液が、僕の口に合わなくて本当によかったと思う。ジューシーだけど、君の体液はおいしくない。外国の泥水みたいだ。だから、僕はそれを吸い尽くさずに済む。ぷつり、と破ける音がして、歯にかかっていた力が少し、抜ける。穴があく。あいて、流れる。そこから流れ出るのは本質だ、と誰かが言う。本質、てなに？と君は言う。気の利いた返答はそこにはない。僕も何も言えなくなる。

わん、という。

ああ。

おまえか。どうした、そんな顔をして。僕を見上げて。吠えるのか。僕の手にさがる、あぶらあげが食べたいのか。あげないよ。これはあげない。まだ炙っていないし、これはツキのだ。まだ煮ていないし、君のだ。君のために買った。豆腐屋さんだ。髭が生えている。笑顔が、ちりがみのようだった。こぼした醤油を拭くときのちりがみだ。まだ会えていない。ツキだ。これは君の話だ。

わん、と吠える。僕が吠える。僕は犬じゃないけど、吠えることが出来る。口を開け、空気を吸い込んで、吐き出す。そのとき、喉が震える。喉と、胸が震える。震動して、それが、吠える、だ。全然関係はないけれど「吠える」という字と「吐く」という字は似ていると思う。わん、と吠える。何度でも吠える。何度でも吠えることが出来る。吐き出すことが出来る。

夜だ。君と同じ名前の星が浮かび、僕を覆う。僕のなき声が覆われ、やがて覆う。

世界の半分は、夜だ。

だから僕は君が待つ夜へと歩を進める。

もう、夜になっている、と君は言う。でも、君に会うのは、まだ先のことだ。

まだ、まだ、先のことだ。

だから、僕は君が待つ夜へと歩を進め続けている。

続けている。